

# 会派調査(研修)報告書

NO.

令和 6年 11月 5日

胎内市議会議長

八幡元弘様

(報告者) 緑風会

会長 薄田 智

緑風会 会派行政視察 について、  
議会会議規則第110条により、下記のとおり報告します。

調査・研修 日時	自 令和 6年 10月 23日 至 令和 6年 10月 26日 3泊 4日 ( 4日間)	調査・研修 場所	① 青森県青森市 ② 青森県むつ市
調査・研修 事項	① 青森県青森市 道の駅なみおかアップルヒルの運営について ② 青森県むつ市 むつ市における地域公共交通の「リ・デザイン」について		
調査・研修 出席者(参加者)	会長 薄田 智 副会長 渡辺秀敏 幹事長 笥智也 会計 増子達也 渡辺宏行 坂上清一 八幡元弘		
相手方(対応者)	①青森県青森市 株式会社アップルヒル 営業企画・広報課 課長兼任 人事課 課長兼任 小笠原優子 浪岡振興部 地域づくり振興課 地域振興チーム 主査 蝦名大輔 議会事務局 主査 石田彩美 ②青森県むつ市 政策推進部 次長 黒澤幸太郎 政策推進部 交通政策課 主任主査 藤井剛 政策推進部 交通政策課 主任 山崎未来 議会事務局 事務局長 佐藤孝悦 同 主任 浜端快		

## 調査の結果または概要

### ○青森県青森市（10月24日(木) 10:00～12:00）

青森県のほぼ中央に位置し、北部は陸奥湾に面し、東部と南部は奥羽山脈の一部をなす東岳山地から八甲田連峰に、西部は梵珠山を含む津軽山地から津軽平野へ連なるなど、雄大な自然に囲まれている。青森県の県庁所在地及び交通・行政・経済・文化の中心都市としての都市機能が集積している。

### ○青森県むつ市（10月25日(金) 10:00～11:30）

下北半島に位置し、陸奥湾と津軽海峡に面する本州最北端の市で、2005年の市町村合併により、青森県総面積の約11%を占める県内で最も大きな面積を持つ自治体である。鉄道路線としてJR東日本による大湊線があるが、市内中心部の大湊駅が終着点となっており、市内交通としての機能性は低い。下北半島縦貫道路が延伸建設中。

< 青森県青森市 >

道の駅なみおかアップルヒルの運営について

本施設は、国道7号線に面し、全国で唯一りんご園を持つ道の駅で、全国道の駅グランプリ2022で5位、東北で1位に選出されるなど、満足度の高い道の駅として人気を博しており、年間200万人ほどの入場者数を誇る。平成8年に旧浪岡町において、農業振興・地域振興及び地元住民の雇用の場として建設された形成促進施設アップルヒルの管理運営を行うために設立された、地域特産品の普及、販売、地域PR、りんご生産などが主業務である。そのため管理運営には専門的知識を有するほか、民間感覚による安定的な経営と公共施設の運営という公平の確保が必要であることから、管理運営を実施するために設立された株式会社アップルヒルは第三セクターの形態となっている。平成17年4月に旧青森市と旧浪岡町が合併し、今年で28年を迎える。

レストラン・物産販売・農産物直売・テナントの4部門で展開しており、開設から売上は順調に推移し、平成28年度からは7億円を突破。コロナ禍で一時5億円台に大幅ダウンするも令和3年を底にV字回復し、コロナ禍前の実績を目指して運営されている。

行政からの指定管理料は年間440万円程度とのことで、自主運営努力で売り上げを確保する必要があり、地域に根付いたイベントや独自企画製造商品の販売など、魅力向上につながる努力を40名のスタッフが一丸となって行っている。四季に合わせたイベントや、他の道の駅や物産館との交流を深めるイベントを開催するとともに、地域連携事業にも力を入れており、交通安全運動や検診バス、マイナンバー出張窓口申請サポートなどに会場を提供したり、ホームステイでの事業体験を受け入れたり、多岐にわたり地域づくりとなるきっかけの場を提供しているとのこと。併せて、地域活性化の拠点となる付加価値を創出する企画立案を実施するため、また、観光振興や地域づくりを学ぶ場として、県内外の大学と連携するなどし、将来の担い手となる人材を育成・確保するべく、若者の視点による観光資源の発掘やイベント企画運営、ホーム

ページ作成やSNSなどを活用した情報発信を進めており、観光マップの作成、地元産品を活用した商品やメニューの作成、イベントポスターデザインなど様々な取り組みを実施されている。

説明を受けながら販売所やテナントブース、イベント用リンゴ畑など回る中で、来場者は高年齢層の割合が高いように感じられた。平日昼間という時間帯の影響もあると思われるが、休日などはファミリー層も多く来場されるようで、普通車 130 台・大型車 7 台という駐車場に停めることができないほど賑わいを見せるとのこと。老若男女問わずに人気を博していることがうかがえた。

J R 浪岡駅・高速浪岡 I C から車で約 5 分、青森空港から車で約 15 分など、交通の便が良いこともあろうが、それ以上に常時魅力を発信し続ける運営姿勢が、多くの来場者を引き付けている要因であると感じた。地域の持っている特徴をどのように活用していくか、リピートしてもらうためにどう展開するか。ただ待っているだけではない、民間感覚を十分生かした取り組みがなされているということが、当市における様々な事業に大いに参考になるものであった。

## < 青森県むつ市 >

### むつ市における地域公共交通の「リ・デザイン」について

ローカル鉄道や路線バスなどの地域公共交通は、地域の社会経済活動に不可欠な基盤である。むつ市では、人口減少や少子化、マイカー利用の普及やライフスタイルに変化等による長期的な需要減により、多くの事業者が厳しい状況の中、新型コロナの影響もあり、一気に10年以上も負の時間が進んだとの見方もあるほどの深刻な問題と捉えている。こうした需要の減少は、交通事業者の経営努力のみでは避けられないものであるため、地域公共交通の「リ・デザイン」（再構築）を進め始めたとのこと。その内訳として、官民共創・交通事業者共創・他分野共創の「3つの共創」、自動運転やMaaSなどのデジタル技術を実装する「交通DX」、車両電動化や再エネ地産地消などの「交通GX」の3つを柱とした取組みを計画し、現在は官民共創のみを進めている。

むつ市では、人口減少により市内の公共交通利用者が、2014年の約45万8千人から10年で約17万6千人減少しており、重ねてバス事業者の運転手不足等の影響もあり、交通事業者の撤退や路線廃止が増えた。市中心部以外の山間地域での移動難民・交通難民が多く生まれることを懸念し、事業者委託によるデマンド型乗合タクシーの実証運行を経て本格運行となった。しかし過疎地域に辛うじて残っていた路線バスが令和5年度末で廃止となったことに伴い、令和6年度より市直営の自家用有償旅客運送（公共ライドシェア）によるむつ市コミュニティタクシーの運行が始まっている。完全電話予約制で停留所乗降、平日のみの運行とし、一人当たりの運賃は片道200円からで上限は1000円。運賃設定は、廃線となった路線バス運賃と、タクシー利用時の運賃の約1/4となる金額で設定されており、利用者からの不満の声などはほぼないとのこと。病院利用者への配慮として早朝運行が望まれるため、月曜のみ事業者委託とし、他は市の公用車を利用して市職員運転による直営運行として経費節約を行っている。

交通弱者になりやすい75歳以上の高齢者を対象に、むつ市高齢者無料乗車

証（AGEHA）事業を、令和3年10月から行っている。市内高齢者の積極的な社会参加による健康増進及び福祉の向上と公共交通の利用促進を目的とし、マイナンバーカードを利用した乗車証を交付しており、令和5年度実績で約18%がAGEHA利用者であり、事業実施前より公共交通利用者が増加しているとのこと。その分事業費負担が増えてきており、市単独の事業費のため厳しいのが実状とのことであった。また、部活動等の地域移行に伴い、今後は活動場所へ向かうための移動手段の対応策として、児童生徒向けの同様事業を計画されているとのことであった。

令和6年度策定の下北地域公共交通計画として、交通DXに取り組む予定で、自動運転バスの導入を計画しており、青森県内で開催されている実証実験車両体験など情報収集を行っており、次年度以降導入に向けた動きを本格化していく予定とのこと。ただその導入割合については、現存している公共交通との兼ね合いを考える必要もあるようで、バランス調整等も今後の課題とされていた。その自動運転バスの対策費用については、国土交通省による10/10であるとのこと。また意見交換の中で、タイミングよく26日までの期限内で自動運転の実証実験を行っている現場情報を頂けたため、最終日に赴くことができ、実物を確認することができた。

交通GXについては、今後EVバスの導入を考えていくとのことであった。

「リ・デザイン」を進める上での費用対効果については、公共交通自体が赤字ベースであるとの認識から、事業者と共存できる体制を作っていく必要があるとのことであった。

当市は既に路線バスが廃止となり、デマンド型乗合タクシーが主となっているが、利用時間帯やニーズの充足などと共に、過疎化・高齢化・少子化などむつ市と同じような問題がある事実を踏まえ、公共交通の現状と問題点を見つめ直すことも必要ではないかと感じた。